HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	諸本の比較からみた日本書紀古訓の形容詞
Author(s)	劉, 琳
Citation	研究論集, 15, 109(左)-124(左)
Issue Date	2016-01-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.15.l109
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60550
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_010_liu.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/rjgsl.15.l 109

諸本の比較からみた日本書紀古訓の形容詞

劉　　琳

要　旨

『日本書紀』は日本最古の編年体史書，六国史の第一として古くから尊重されてきた。日本の正史にふさわしいものとするために，『日本書紀』全書三十巻は歌謡部分を除き，当時日本周辺の朝鮮半島諸国や中国で共通して使用された正式な漢文によって記述された。『日本書紀』に関する解釈・研究には，長い伝統がある。この書が完成された翌年（721 年）から早く当時の宮廷において「日本書紀講筵」と呼ばれる『日本書紀』の本文を読み解く講義が行われた。そして，『日本書紀』に関する研究の蓄積として，『日本書紀』の諸古写本に存する訓点・日本書紀私記類・日本書紀の注釈書など，長く伝えられている。このように，『日本書紀』の本文を読み下す長い伝統から生まれてきたもの，即ち『日本書紀』の諸古写本に存する訓点のことを日本書紀古訓と言う。日本書紀古訓は『日本書紀』の本文を解釈する重要な典拠である。そして，古い日本語の実態を知る上で重要な手懸かりの一つであるため，従来重要視されてきた。

『日本書紀』の現存する諸伝本の中，巻二二と巻二四を有する伝本は比較的多い。本稿では日本書紀古訓形容詞の実態，特に各伝本における異同を考察するために，巻二二と巻二四を有する平安時代，室町時代及び江戸時代の代表的な『日本書紀』の古写本，版本を用いる。考察内容は，各伝本から収集した古訓形容詞のデータに基づいて付訓状況・語数・使用語彙などを統計し，各伝本における同一漢文に当てられた古訓を比較し，その共通面と相違面を検討することである。考察を通して日本書紀古訓の形容詞は，どのような性格を有するものか，明らかにしたいと思う。また，日本書紀古訓形容詞の様相，異なる伝本において古訓形容詞語彙使用の実態及びその相違などを解明することも本稿の目的である。

1．はじめに

通常『日本書紀』の諸本に見られる訓読のことを日本書紀古訓と言う。日本書紀古訓は『日

本書紀』の漢文本文を解釈する際に，重要な根拠となる[1]。そして，時代や学派によって差があり，共時的にも通時的にも複雑な構造を持っているとされる。日本書紀古訓には一般訓点資料の訓読に比べ，上代語が残存することや特殊語彙が存するなどの特異性により，古くから注目されてきた。

本稿では，『日本書紀』の訓点本に見える形容詞和訓のみを対象に，『日本書紀』の諸本における形容詞による付訓状況を整理し，日本書紀古訓形容詞の実態・性格，諸本における古訓形容詞の共通面と相違面，更に歴史的変遷の有無を調査し，検討を試みる。

2．先行研究と研究目的・方法

2.1．先行研究

日本書紀古訓に関して，既に数多くの先行研究によって優れた成果が蓄積されてきた。日本書紀古訓が漢籍と緊密な関係があることについては神田（1949）や小島（1962）などの論考によって明らかにされた。

神田（1949）は日本書紀古訓について，二九の用例を中心に考察を加え，次のようにその特質[2] を指摘し，その後の日本書紀古訓に関する研究の基礎となった。

一　古訓は漢土訓詁学上より見て極めて正確なること

二　古訓の一見疑わしきものも必ず何かの典拠に基づくものなること

三　古訓には今日古典の正統的注釈書と認められるものに必ずしも依拠せざるものの多きこと

上野（1952）は日本書紀古訓の特性に焦点をあてて岩崎本を中心に調査し，更に吉田本との比較をした上で，「日本書紀訓読の姿は特殊である。必ずしも訓読に適せざる文章に対して能ふ限り国語 ── 然も古い国語 ── を以て読まんとする意図が著しい」[3] と述べている。

また日本書紀古訓と漢籍の訓読との比較によって，日本書紀古訓の特性を明らかにされたのは築島（1963）である。築島（1963）は『日本書紀』の平安時代の古写本を資料として，日本書紀古訓について調査・検討した上で，日本書紀古訓は一般の漢文訓読と異なる特性を持つと指摘し，その特性を明らかにした。日本書紀古訓の性格について，次のように述べている[4]。

一　日本書紀古訓は字音語が極めて少ないこと

二　漢字の字面から離れた意訳的な訓法をすること

1　杉浦克己（2008）「日本書紀古訓の諸相」『日本語学』27(12)，14-23 頁明治書院

2　神田喜一郎 1949『日本書紀古訓攷証』（後語）101 頁　養徳社

3　上野務 1952「日本書紀古訓に関する一考察 ── 岩崎本を中心として ──」59 頁『芸林』 3 芸林会

4　築島裕 1963『平安時代の漢文訓読語につきての研究』128-181 頁　東京大学出版会

三　訓読に見えず，和文のみに見える語彙を用いること

四　当時一般の訓読に用いない上代語を用いること

五　日本書紀古訓だけに存する特異な表現が見えること

小林（1969）は日本書紀古訓と漢籍の訓読との密接な関係がある所から出発して，日本書紀古訓の特性を担う語と，漢籍において特別に伝えられた漢籍の古訓読語とで共通するものを取り上げ，そして訓法において共通する部分も指摘し，その共通面を通して窺われる両者の訓読語の性格を提示する。そして，両者の相違点を通して，それぞれの訓読語を漢文訓読史上の位置づけを論究している。また，同じような日本書紀古訓と漢籍の訓読語との比較研究には大野晋[5]と林勉の一連の論考[6]も見られる。

諸伝本訓点の年代性及び系統などに関してその実際を明らかにしたのは石塚(1978)，(1981)などの一連の研究である。異なる伝本の訓読を比較し，その差異に関して，神代巻を中心として検討したのは杉浦（1995）である。また，日本書紀古訓の語彙について，三保（1995）は『日本書紀』の岩崎本，前田本，北野本など，五種の伝本を対象として，『日本書紀』の本文における助数詞の用法を観察し，更にその古訓における助数詞の受容，摂取の様相を検討している。

本稿では，以上の先行研究を踏まえ，『日本書紀』の平安時代，室町時代及び江戸時代に代表的な古写本と版本を用い，古訓の形容詞を収集し，その実態・諸本間の異同を比較・検討する。

2.2. 研究目的と方法

本稿では『日本書紀』の代表的な古写本や版本を利用して古訓の形容詞を収集する。日本書紀の古訓に見える形容詞語彙が，どのような性格を有するものかを調査して，考えてみたいと思う。考察を通して日本書紀古訓における形容詞語彙の様相，異なる伝本において形容詞語彙使用の実態及びその相違の解明を目的とする。

『日本書紀』の現存する諸伝本の中，巻二二と巻二四を有する伝本は比較的多い。本稿では巻二二と巻二四を有する古写本系統の岩崎本・図書寮本，卜部家系統の兼右本，近世刊本の寛文九年版本の四種を調査資料とする。それぞれの伝本の巻二二と巻二四から形容詞和訓を抽出して，整理する。同じ漢文に対して諸本の形容詞和訓の付訓状況，語数，語彙などの様相を調査する。そして，四種の日本書紀古訓資料における同一漢文と対応する和訓を比較して，その共通面と相違面とを考察する。

---

[5] 大野晋『日本書紀』（解題）日本古典文学大系（新装版）1993

[6] 林勉（1970，1971，1972，1973）は岩崎本を中心に，ほかの日本書紀古写本や漢籍仏典と比較し，岩崎本訓点の音韻・語法上の特徴などを論じている。

3．諸本を用いた日本書紀古訓の形容詞に関する調査

現存する『日本書紀』の諸伝本は数十種あり，一般的には古写本系統，卜部家系統，近世刊本の三種類に大別される。古写本系統の四天王寺本（巻一），佐々木本（巻一），田中本（巻十），猪熊本（巻一）の四種は『日本書紀』の現存する諸本の中でも最古のものと言われ，奈良時代末期或は平安時代初期の書写とされる。しかし，いずれも漢文の本文のみであり，訓点はない。本稿は形容詞和訓を中心な研究対象とするため，上記訓点のない四種の伝本は本研究の対象としない。本稿の調査対象とする日本書紀古訓の資料は，古写本系統に属する岩崎本と図書寮本，卜部家系統に属する兼右本，近世刊本に属する寛文九年版本であり，全四種の『日本書紀』の古訓資料である。

3.1．古写本系統『日本書紀』の古訓形容詞

3.1.1．対象資料

（一）岩崎本：築島裕・石塚晴通（1978）『東洋文庫蔵岩崎本日本書紀本文と索引』

岩崎本は巻二二，二四の二巻のみ現存し，『日本書紀』古写本の中で最古の訓点を持っている。日本書紀の各種の訓点本のみならず，他の漢籍・仏典の訓読法とも異なるため，比較研究上貴重な資料とされる。岩崎本の訓点は複雑な様相を呈し，その中の同じ漢文箇所でも学統も時代によって異なる読み方が見られる。その訓点は次の三種類に分けられる[7]。

Ⓐ平安中期末の古い博士家点

Ⓑ院政期の博士家点（1086 年～1185 年）

Ⓒ室町時代宝徳 3 年（1451 年）点及び文明 6 年（1474 年）点，ともに一条兼良加点。

（二）図書寮本：石塚晴通 2006『宮内庁書陵部影印集成・日本書紀』

図書寮本日本書紀は巻十二，十三，十四，十五，十七，二一，二二，二三，二四の十巻が現存し，平安時代永治二年ごろの書写加点とされ，紀伝道大江家の訓点とされる。

3.1.2．岩崎本の古訓形容詞の実態

岩崎本日本書紀二巻の訓点には時代が異なる三つの時期の加点があり，同じ古写本系統の図書寮本に比べ，本文に加点する箇所が多いという様相を呈するが，全ての語句に省略がなく，訓読を示しているのではなく，漢文箇所によって全付訓と部分付訓，各時期の付訓は確定した一訓のみが示される場合が多く，再出語への付訓が省略されるなどの状況が見られる。形容詞和訓を収集し，全付訓か部分付訓か，異なり語数と用例数の統計，対応する漢文との関係などについて見ていく。形容詞和訓の全付訓と部分付訓については，次の例を参照されたい。

---

[7] 築島裕・石塚晴通 1978『東洋文庫蔵岩崎本日本書紀本文と索引』 7 頁日本古典文学会

⑴遂雨五日溥潤天下。「アマネク」　　（巻二四－69 行）Ⓐ平安中期末点Ⓑ院政期点）

⑵其臨大事而不遂矣甚悲乎。「（カナ）シ」　　（巻二二－85 行Ⓐ平安中期末点）

例⑴の「溥」に充てられた和訓は形容詞「アマネク」，補読がないため，全付訓と見なす。例⑵の「悲」に充てられた和訓は「カナシ」という形容詞であるが，その語尾のみ示して，築島・石塚（1978）には補読があるため，部分付訓とする。

次の表 1 では岩崎本各時期加点における形容詞和訓の異なり語数，延べ語数，全付訓と部分付訓の数を示している。

表 1

岩崎本	訓点	全付訓	部分付訓	異なり語数	述べ語数
巻二二	Ⓐ平安中期末	24	19	34	43
	Ⓑ院政期	18	10	25	28
	Ⓒ室町時代	41	23	44	64
巻二四	Ⓐ平安中期末	23	5	24	28
	Ⓑ院政期	24	4	24	28
	Ⓒ室町時代	8	9	17	17

表 1 に示したように，付訓の状況，異なり語数・延べ語数において各時期の加点は出入りがあることが知られる。形容詞和訓の付訓状況からみると，巻二二のⒶ平安中期末点は全用例数 43 の内，全付訓箇所は 24，Ⓑ院政期点は全用例数 28 の内，全付訓箇所は 18，Ⓒ室町時代点は全用例数 64 の内，全付訓箇所は 41，それぞれ用例数全体の 55.81％，64.29％，64.06％を占め，すなわち用例数の半分以上である。巻二四のⒶ平安中期末点の全付訓箇所は用例数全体の 82.14％，Ⓑ院政期点は 85.71％，Ⓒ室町時代点は 47.06％を占める。巻二四は巻二二に比べ，Ⓐ平安中期末点とⒷ院政期点は形容詞和訓の全付訓箇所が多く，用例数全体を占める比率も高いが，Ⓒ室町時代点の比率は低いことが知られる。形容詞和訓の付訓状況のみを見れば，岩崎本の巻二二と巻二四の付訓態度にはやや相違があると思われる。

異なり語数と用例数から見れば，巻二二はⒸ室町時代点の語数が最も多く，44 語である。それに対し，巻二四はⒶ平安中期末点とⒷ院政期点の語数が多く，28 語である。語彙の実際の使用状況を見ると，巻二二と二四の二巻，三つの時期に加点するものはどちらも七割以上の形容詞は一度しか使われてない点に共通する。使用度数が多い語はアシ（悪，非，毒），アマネシ（周，洽，溥），イササケシ（少，小），サカシ（賢，哲），フカシ（深幽），ヨシ（良，是，好）等が挙げられ，いずれも原文漢文の意味において共通な面があり，同じ和訓が充てられたため，使用度数はほかの形容詞和訓よりやや多くなると考えられる。

また，形容詞和訓の内訳を確認すると，同じ漢文箇所に対し，巻二二はⒶ平安中期末点の付訓があるが，Ⓑ院政期点の付訓がないため，Ⓑ院政期点の語数はⒶ平安中期末点のそれより少ない。しかし，使用する語彙の 25 語はⒶ平安中期末点のものと完全に一致する。巻二四はⒶ平

安中期末点とⒷ院政期点の語数，使用語彙は完全に一致する。しかし，Ⓒ室町時代点を見ると，語彙にかなりな相違が認められる。それは，Ⓐ平安中期末とⒷ院政期に加点した漢文箇所に再度付訓する箇所が少なく，再度付訓があっても読み方が違う場合が多いためである。Ⓐ平安中期末点とⒷ院政期点に付訓がない漢文箇所に訓を付けるという姿勢によると思われる。三つの時期に加点するものの相違については後節に詳しく検討する。

次は形容詞和訓について岩崎本における三種の加点が共通する語とⒶ平安中期末，Ⓒ室町時代に加点の独自の語を示す。

巻二二Ⓐ平安中期末点Ⓑ院政期点Ⓒ室町時代点の共通語彙（16語）

1アシ（惡）　2アシ（非）　3アマネシ（周）　4イササケシ（少，小）　5オソシ（晏）
6カタマシ（鈃）　7カヘカヘシ（反覆）　8サカシ（賢）　9スミヤケシ（急）
10チヒサシ（少）　11ムナシ（空）　12ヨシ（是）　13ヨシ（好・良）　14ワカシ（少幼）
15ワイワイシ（辨才）　16ヰヤナシ（不禮）

巻二二Ⓐ平安中期末の独自語彙（4語）

1アラシ（暴）　2イツクシ（憲）　3サカナシ（不良）　4ヒサシ（久）

巻二二Ⓒ室町時代の独自語彙（26語）

1アカシ（赤）　2アツシ（敦，厚）　3アヤフシ（危）　4イトマナシ（靡盬）
5ウタカハシ（疑）　6オモシ（重）　7カシコシ（賢愚）　8カタシ（難）　9クヤシ（悔）
10サカシ（賢）　11シケシ（繁）　12シロシ（白）　13スクナシ（少）　14スズシ（冷）
15タカシ（達，高）　16タフトシ（貴）　17タヤスシ（輒）　18トオシ（達）
19トヲキヲソシ（急緩，遐邇）　20フカシ（深）　21ナシ（無）　22ニハシ（新）
23マツシ（貧）　24ムツマシ（斷金）　25メツラシ（珎）　26ワカシ（稚）

巻二四Ⓐ平安中期末点Ⓑ院政期点Ⓒ室町時代点の共通語彙（9語）

1アヤフシ（殆）　2アヤシ（記）　3イノチナカシ（壽）　4ウツムナシ（定，決）
5ウルハシ（全）　6オモシロシ（伎）　7サカシ（賢，哲）　8チヒサシ（小）
9ワツラハシ（煩労）

巻二四Ⓐ平安中期末点Ⓑ院政期点の独自語彙（13語）

1アシ（暴）　2アマネシ（溥）　3カウハシ（氣）　4キヨシ（赤）　5クサシ（臭）
6タタシ（正）　7トシ（疾）　8ナシ（不在）　9フカシ（幽）　10ニヒシ（新）
11ヰヤナシ（無禮）　13ユルシ（順）

巻二四Ⓒ室町時代の独自語彙（7語）

1アラシ（暴）　2ウタカハシ（決）　3タカシ（高）　4チカシ（近）　5ツハヒラケシ（曲）
6ムツマシ（婚姻）　7ワカシ（幼）

3.1.3. 図書寮本の古訓形容詞の実態

図書寮本の古訓形容詞について，前節と同じように，まず付訓の状況，異なり語数と延べ語

数から見ていく。表 2 には図書寮本の形容詞和訓の異なり語数，延べ語数，全付訓と部分付訓の数を示す。

表 2

図書寮本	全付訓	部分付訓	異なり語数	延べ語数
巻二二	35	6	35	41
巻二四	25	2	25	27

図書寮本において，基本的には全付訓という付訓の態度が窺がえる。次の例(3)－(5)の示すように部分付訓のものはその訓の省略方法には形容詞の語尾あるいは語幹のみを示すものと，形容詞最初の仮名のみを示すものなどがある。そして，複数訓の併記は少なく，下記の例(6)の一箇所を除き，全部の形容詞和訓は確定した一訓のみが示される。

(3) 其臨大事而不遂矣甚悲乎「(カナ) シ」(巻二二 21 オ－ 6)

(4) 百濟是多反覆之國「カヘカヘシキ」(巻二二 41 オ－ 8)

(5) 篤敬三寶「ア (ツク)」(巻二二 22 オ－ 8)

(6) 豈獨朕不賢耶大臣亦不忠「右：ヲサナカラ　左：ヲサナシ」(巻二二 45 ウ－ 1)

巻二二は巻二四に比して，形容詞和訓の異なり語数と用例数も少し上回っている。巻二四より巻二二の分量が少し多いのがその理由の一つではないかと思われる。二巻の共通する語彙も少なくはないが，九割ほど一度のみ使い，使用度数が低いことが知られる。二回以上使用される語彙は巻二二には 5 語，巻二四には 3 語しかない。

巻二二①アツシ：篤敬三寶（アツク）　就禮神祇周祠山川（アツク）

②イササケシ：事無大少得人必治（イタサケト）　少事是輕不可必衆（イササケク）

③カタマシ：亦佞媚者對上則好說下過（カタマシク）

奸者有官禍亂則繁（カタマシキ人）

④サカシ：其賢哲任官頌音則（サカシキヒト）　五百之乃今遇賢（サカシヒト）

然我王聞日本天皇之賢哲…（サカシキ）

⑤オ（ヲ）ソシ：群卿百寮早朝晏（ヲソク）　退後擊之不晩也（オソカラ）

巻二四①アシ：總言不知且疑毒物(アシキ)　知得志欲歸之意與毒殺之(アシキモノ)

②ニヒシ：淨掃別殿高鋪新蘆（褥）(ニヒシキ)　而使呼曰新富入來（ニヒシキ）

③タタシ：爲人恵正有匡濟心（タタシ）　中臣鎌子連爲人恵正（タタシ）

上記の巻二四の例①のように訓と対応するのは同じ漢字であるか，あるいはそれ以外の例のように対応する漢字は不一致するが，意味上に共通な面があり，同じ和訓が充てられたのである。これは岩崎本の付訓状況と一致する。

巻二二と巻二四の重複語彙を除き，図書寮本の形容詞和訓の異なり語数は 52 語であり，述べ語数は 68 語である。そして，古訓形容詞の内訳をみると，「カナシ（悲），カタシ（固），チカ

シ（近）」のような語を除き，他は「アマネシ，イササケシ，イサヲシ，カヘカヘシ，カタマシ」など，古い語がほとんどである。次に示すのは図書寮本巻二二，巻二四の共通する語彙及びそれぞれの独自語彙である。

二巻の共通する語彙（ 6 語）

1 アシ（惡）　2 オ（ヲ）ソシ（晩，晏）　3 サカシ（賢，哲）　4 トシ（利，疾）　5 ワカシ（少幼，幼）　6 ヰヤナシ（不礼，無禮）

巻二二の独自語彙（29 語）

1 アツシ（篤，就）　2 アマネシ（周）　3 アヤフシ（危）　4 イササケシ（少）　5 イサヲシ（忠）　6 イツクシ（憲）　7 イトナシ（摩監）　8 カシコシ（畏）　9 カタマシ（釵，佞）　10 カナシ（悲）　11 カヘカヘシ（反覆）　12 キラキラシ（端麗）　13 サカナシ（不良）　14 スクナシ（鮮）　15 タハヤスシ（輙）　16 チヒサシ（少）　17 ツタナシ（不忠）　18 トオクチカシ（遐邇）　19 トモシ（乏）　20 ナシ（無）　21 ニヒシ（新）　22 ムツマシ（斷金）　23 ムナシ（空）　24 メクシ（愛）　25 ヤスシ（安）　26 ヨシ（好）　27 ワカシ（稚）　28 ヲサナシ（不賢）　29 ヲサヲサシ（軏制）

巻二四の独自語彙（19 語）

1 アシ（暴）　2 アシ（毒）　3 アラシ（暴）　4 アヤシ（奇）　5 イノチナカシ（壽）　6 ウツナシ（定）　7 ウツムマシ（決）　8 ウルハシ（善）　9 オモシロシ（伎）　10 カウハシ（氣）　11 カタシ（固）　12 キヨシ（赤）　13 クサシ（臭）　14 タタシ（正，匡）　15 チカシ（近）　16 ツハヒラケシ（曲）　17 ナシ（不在）　18 フカシ（幽）　19 ニヒシ（新）

二巻の共通する古訓形容詞と対応する原文の漢字が異なるのはほとんどであるが，漢字の意味は共通な面がある。そして，上記に示す二回以上用いた和訓と対応する漢字も同じ状況であり，意味的には近い漢字である。したがって，図書寮本において同じ漢文の語彙の再出する箇所に対し基本的には再度付訓はしないという付訓の態度が知られる。

3.2. 卜部家系統『日本書記』の古訓形容詞

石塚には卜部家系統に属する兼方本を中心とする論考があり，卜部家系日本書紀古訓の特徴を指摘している。石塚（1983）は「訓点資料としての日本書紀古訓は，鎌倉中期の卜部家系加点本より前と以降では，その性格を異にする。平安時代加点諸本の訓み方は概して師資相承に基づく均質的なものであるが，卜部家系加点本の訓み方は年代的にも位相的にも異質なものを含んでいる」と述べている[8]。本稿では，形容詞和訓を中心に卜部家系の訓点を古写本系統の岩崎本及び図書寮本のそれとの相違を考察する。

卜部家系統『日本書紀』の写本は，卜部兼方本（巻一・二），卜部兼夏本（巻一・二）及び卜

[8] 石塚晴通 1983「日本書紀の古訓について其の一」 2 頁『天理図書館善本叢書月報』55

部兼右本（巻三～三十）などにより，全三十巻が揃っている。本稿では，巻二二と巻二四を有する兼右本を調査資料とする。

3.2.1. 対象資料

兼右本：天理図書館叢書『日本書紀兼右本（一～三）』八木書店（1983）

兼右本は卜部家相伝の本が大永五年（1525）に紛失したために，卜部兼右が天文九年（1540）に完成されたものである。兼右本は三条西家本を底本として一条殿之御本等により校訂を加えて作り上げた本と言われる。三条西家本は，卜部家本の流れを伝え，流布本である寛文九年版本に繋って行くものであるが，一条殿之御本の巻二二と巻二四の二巻が岩崎本として現存し，卜部家系統とは大きく異なるものである[9]。兼右本は巻三～巻二八の二十八巻が現存し，人皇巻を完備したものとしては最古とされるため，『日本書紀』の研究において貴重な資料とされる。

3.2.2. 兼右本の古訓形容詞の実態

古写本系統の岩崎本と図書寮本の付訓は漢字の左右両側にそれぞれ訓を付ける箇所はわずかである。それに対し，兼右本形容詞で付訓するのは巻二二 99 箇所，巻二四 38 箇所であり，左右二訓があるのは巻二二 24 箇所，巻二四 11 箇所であり，二訓併記の箇所はいずれも少ないとは言えない。兼右本の巻三十の奥書に「尤可謂第一之証本矣」と記したが，付訓の正確さの証拠かと思われる。次は古写本系統の伝本と同じような調査を通して，兼右本の付訓状況，異なり語数，延べ語数，使用語彙などを見ていく。

表 3

兼右本	全付訓	部分付訓	左右二訓	異なり語数	延べ語数
巻二二	96	11	24	63	107
巻二四	40	5	11	33	45

付訓の状況から見ると巻二二，二四の二巻，ともに九割以上の箇所は省略はなく全付訓であり，部分付訓のものは前節で調査した岩崎本，図書寮本と同じ省略の方法が見られる。すなわち形容詞の語尾のみを付ける方法或いは最初の仮名を示す方法である。岩崎本，図書寮本と異なり，例⑺のように形容詞の一部のみを示す方法も見られる。

⑺大__小魚臭如夏爛死「チ（ヒサ）キ」　（巻二四十オ－２）

漢字両側の二訓以上を併記した箇所について，その用例を収集し整理した結果

①全付訓と部分付訓

②左右二訓の品詞が不一致

③両方とも形容詞，用いた語が異なるが，意味が共通する

④両方とも形容詞，用いた語が異なり，意味も不一致な面がある

[9] 石塚晴通 1983「日本書紀の古訓について其の二」『天理図書館善本叢書月報』56　1 頁

⑤語法が異なり，形容詞語幹＋名詞（古い語法），形容詞連体形＋名詞

上記の五種の状況が見られる。次に示すのはその例である。

⑻乏＿者之訴似水投石　「右訓：トモシキモノ　左訓：（トモシキ）ヒト」
（巻二二九オ－５）

⑼爲絶人－民之鋒＿劒　「右：スクレタルツルキ　左：トキツルキ」　（巻二二九ウ－１）

⑽其賢－哲任官頌音則　「右：サカシヒト　左：カシコキヒト」　（巻二二九ウ－４）

⑾入鹿極甚愚癡専行＿暴＿惡　「右：アライワサオコナフ　左：アシキワサス」
（巻二四十三ウ－６）

⑿陳＿酒陳＿菜六畜於路側　「左：フルサケフルナ　左：フルキ」　（巻二四十八オ－８）

例⑻は漢文と和訓の両方とも形容詞が名詞を修飾する用法であり，右訓は「トモシキモノ」の全付訓，左訓は修飾語としての形容詞を略した。そして，漢字「者」につけた訓はそれぞれ「ヒト，モノ」であり，左右が異なる。「者」字を「ヒト」と読む例は，漢籍の訓点資料には多く見られるものである。門前（1959）は「者」字を「ヒト」と読むのは平安初期の古訓法であり，「モノ」と読むのはそれ以降の新しい訓法と述べている[10]。これより，兼右本には平安時代の古訓法の残存と加点当時の訓法とが共存することが分かった。

例⑼の右訓「スクレタル」は動詞であり，左訓「トキ」は形容詞の連体形である。例⑽は左右二訓の両方とも形容詞であり，異なる語を用いたが意味上共通する部分がある例である。例⑾右訓の「アラシ」と左訓の「アシ」の二語は意味上に不一致の例である。例⑿の左訓は上代の形容詞ではよく見られる形容詞語幹が体言を修飾するという古い用法であり，右訓は形容詞の連体形のみを記した。

二訓以上を併記した箇所があり，再出語に対する付訓もあり，加えて付訓した箇所も古写本系統のものより多い，異なり語数は 60 以上を上回るなどは兼右本の特色と言える。語彙の内訳を見ると，古い語が多いが，現代では多用される形容詞も少なくない。そして，一条殿之御本等により校訂を加えて作り上げた本であるためか，使用した語彙は岩崎本と相当の量で一致することがわかる。

3.3．近世刊本『日本書紀』の古訓形容詞

3.3.1．対象資料

寛文九年版本：石塚晴通所蔵本による

寛文九年版本は先行する慶長勅版本の訓点付整版として，寛文九年（1669）に刊行された版本であり，全三十巻が揃っている。江戸時代に広く流布し，数多くの再刷・再刻が行われた。

---

[10] 門前正彦 1959「漢文訓読史上の一問題（二）──「ヒト」より「モノ」へ──」『訓点語と訓点資料』11

後世の諸刊行本には大きな影響を与え，多くは寛文九年版本の訓読を踏襲するとされる。

3.3.2．寛文九年版本の古訓形容詞の実態

寛文九年版本における古訓形容詞の付訓状況，異なり語数，延べ語数など，表 4 に示す。

表 4

兼右本	全付訓	部分付訓	左右二訓	異なり語数	延べ語数
巻二二	67	8	15	50	75
巻二四	31	2	5	26	33

寛文九年版本における形容詞和訓の付訓状況は部分付訓のものがわずかであり，部分付訓の用例では兼右本と同一省略の方法を用いている。形容詞の語尾のみ，最初の仮名を記した例以外は，形容詞の部分的表記もある。兼右本には「コト」をすべて合字「𠮟」で記すが，寛文九年版本には次の例の如く，「コト」と「𠮟」の両方を用い，表記上の不統一が見える。

⒀遲朝不逮于急「右：スミヤカナル𠮟　左：トキコト」（巻二二八ウ－ 3 ）

二訓以上を併記した箇所は兼右本と同じ全付訓と部分付訓するもの，語法が異なるものが見える。しかし，左右二訓の品詞が異なるものが 3 例しか見えず，両方とも形容詞和訓であるが，異なる語を用いたものが見えない。語の使用度数を見れば，2 回以上使用する語が多い。これは兼右本の状況と一致する。語の内訳を見ると，現代語でも多用される「タカシ（高），チカシ（近），ハヤシ（早），ヤスシ（安）」の四語を除き，ほとんど古い語の使用である。

4．諸本における古訓形容詞の比較

『日本書紀』の諸本間の相違について詳しく比較をしたのは石塚晴通と杉浦克己の論考がある。石塚（1978）は岩崎本の三種の訓点について，院政期点の依拠したものは平安中期末点であり，室町時代点は中世における『日本書紀』訓読史上の変遷を考慮して見るべきものであると述べている。石塚（1983）は兼右本の性格を知るために，岩崎本平安中期末点と図書寮本永治二年頃点とともに存してお互いに語彙の異なるもの，巻二四の 171 例について兼右本で確認した。兼右本の読み方は，『日本書紀』の訓の系統の面でも年代性の面でも，入り交じった複雑なものであると指摘する。石塚（1984）は岩崎本平安中期末点と大江家の訓点を伝える図書寮本永治二年（1142）頃点とを，両本がともに存する巻二二と巻二四と徹底比較し，その相違を示した。岩崎本平安中期点と図書寮本との訓点は，訓点資料としての年代的相違とともに訓の系統的相違を示していると指摘している。杉浦（1995）は『日本書紀』神代巻の二巻について諸本間に見える訓読の差異を比較し，その実態を提示した。杉浦（1991），（1992），（1997）は仮名の表記，助字・再読文字の扱い，語彙，敬語表現などいくつかの方面から諸本を比較し，これまでの研究ではあまり触れてない『日本書紀』の訓点本について，それぞれの訓読の特色

を明らかにした。

本稿では，『日本書紀』の諸本に見える訓点の全体ではなく，下記の如く五つの方面より形容詞和訓を中心に調査し，諸本におけるその異同を検討する。

①付訓の状況，②仮名と漢字の表記，③使用語彙および語の古さと新しさ

④読み方の変遷，⑤合符

4.1. 付訓の状況と使用語彙

諸本の付訓状況について前節では詳しく考察したが，ここでは纏めて言うと，岩崎本の各時期の付訓方法には相違があり，特にⒸ室町時代の付訓は前の時代に比してかなり異なる所が見える。各時期の付訓はいずれも二訓以上を併記した箇所が少なく，確定した一訓のみを記すのがは基本である。

図書寮本の二巻はどちらも部分付訓の箇所はわずかであり，二訓以上を併記した箇所は 1 例しか見えず，他の写本より岩崎本巻二四のⒶ平安中期末点Ⓑ院政期の付訓状況に近似している。

兼右本の付訓箇所は寛文九年版本より量的には多いが，部分付訓するものが少なく，左右二訓のある箇所が多く，前の時代の古写本の読み方と加点当時の読み方の入り交じったものがあるなど，両者は付訓の状況では近似している。

使用語彙については，兼右本の付訓箇所は他の写本より多く，再出語への付訓もするため，語数は比較的に多い。

語数に関して，前節でも統計したが，ここでは纏めて表 5 に示す。表 5 は岩崎本，図書寮本，兼右本，寛文九年版本から収集した古訓形容詞について計数する結果である。

表 5

巻	語数	岩崎本			圖書寮本	兼右本	寛文九年版本
		Ⓐ	Ⓑ	Ⓒ			
二二	異なり語数	34	25	44	35	63	50
	述べ語数	43	28	64	41	107	75
二四	異なり語数	24	14	17	25	33	26
	述べ語数	28	28	17	27	45	33

4.2. 仮名と漢字の表記

兼右本と寛文九年版本には合字「𠮟（こと）」の使用が見られる。古写本系統の岩崎本と図書寮本には見えない。そして四種の伝本において，同一漢文箇所に対し，付訓のあるのは巻二二には 45 箇所があり，巻二四には 26 箇所がある。このような箇所に対する諸本に見える和訓を比較し，仮名遣い・漢字の表記がそれぞれ一致するかを見ておく。

仮名遣いが不一致の例：

⑭群卿百寮，早朝晏退。（巻二二）

例⑭は十七条憲法の内容であり，「晏」に当てられた和訓は四種の伝本は一致するが，仮名の表記は異なり，岩崎本と兼右本の和訓は「オソク」であり，図書寮本と寛文九年版本は「ヲソク」である。そして兼右本のみ「晏退」の間に合符が付いたのである。そして，上記の例に「早」に対し，岩崎本と兼右本には読み方として「ハヤク」が見え，一方，寛文九年版本には「トク」の読み方が見られる。

⑮愛育之情，無隔遐邇。（巻二二）

例⑮の「遐邇」の和訓は岩崎本室町時代点と兼右本には「トヲクチカキ」，図書寮本と寛文九年版本には「トホクチカキ」である。

漢字表記が不一致の例：

⑯敦禮神祇，周祠山川，幽通乾坤。（巻二二）

例⑯の「敦禮」の「敦」字は「アツク」という形容詞で読まれ，図書寮本には「就禮」と表記し，「就」は「敦」の誤用と指摘される。そして，「禮」について，兼右本は「礼」を用いた。

上記の例以外は次の例のように兼右本と寛文九年版本の左右二訓とは逆になるものも見える。

⑰大臣亦於今日明日，立俟其誄決矣。（巻二二）

例⑰の「決」に岩崎本では平安中期末点には「ウツムナシ」，院政期点には「ウツムマシ」の和訓が見え，室町時代点は「ウタカハシ」であり，兼右本と寛文九年版本には，左訓と右訓両方あり，兼右本左訓「ウツムマシ」，右訓「ウタカハシ」，寛文九年版本はそれとは反対であり，左訓「ウタカハシ」，右訓「ウツムマシ」である。

上記の例を除き，ほかの状況も見られるが，本稿では一一列挙しないこととした。

4.3．語の古さと新しさ

具体的に使用語彙を見ると，「アマネシ（周），イササケシ（少），カヘカヘシ（反覆），キヨシ（赤），ツバビラケシ（曲）」など，四種の伝本ではいずれも上代形容詞，すなわち古い語の使用が多いが，「アカシ（赤），タカシ（高），（近）チヒサシ（小）」のような岩崎本の◎室町時代点，兼右本，寛文九年版本では新しい読み方も見られる。したがって，四種の伝本ではいずれも古い語と新しい語の併存が見られる。

4.4．読み方の変遷

四種の伝本に見える古訓形容詞には変遷したものは少なくない。次はその例を幾つか挙げてみる。

⑱其詔詐者則爲覆國家之利器，爲絶人民之鋒釼。（巻二二）

「利器」の「利」は四種の写本には同じ訓が見え，「トキ」である。「利」字は刀を以て禾穀を刈るので鋭利の意があり，収穫を得るので利得の意がある[11]。

岩崎本の平安中期点には同じ形容詞で読む「鋒釼」という用例があり，「鋒」字は木の秀（ほ）つ枝に神霊の降下する意。その鋒杉の穂の形を，兵器に及ぼして鋒という。「利」と「鋒」の二字が意味に近似しているため，どちらも「トキ」と訓読されたわけである。しかし，岩崎本室町時代点，図書寮本，兼右本の右訓，寛文九年版本の読み方は変遷があり，その和訓は動詞「スクレタル」になった。

⑲于時，五色幡蓋，種々伎楽，照灼於空，臨垂於寺。（巻二四）

例⑲の「伎樂」，岩崎本には「伎－樂」のようにその間の中央に合符があり，和訓は平安中期末「オモシロキオト」と読んで，院政期点には仮名遣いが異なり「オモシロキヲト」であり，室町時代では「（オモシロキ）コエ」という読み方になったのである。兼右本では合符が二字の左側にあり，訓は「オモシロキコエ」である。寛文九年版本では合符なく，訓は兼右本と一致する。図書寮本の和訓には合符がない。

4.5．合符

合符というのは，漢文訓読における符号の一種であって，漢字二字又は三字以上連結が一纏まりであることを示す働きを持っているものである。二字の纏まりの場合には熟語であることが多い[12]。岩崎本の合符には，漢字二字間の中央の線と漢字二字間の左側の線の二種が見える。合符の位置によって，訓法が異なるとされる[13]。

図書寮本合符の付いたのは 6 箇所しか見えず，漢字二字間の中央と二字間の横側の両方があり，合符の位置に基づき和語一語で読むと和語二語で読むとの区別はしない。兼右本と漢文九年版本は同じ状況であり，合符の位置による読み方の区別はしない。ただし，兼右本には合符の付いた箇所は少なくはない。次の例は諸本における同一漢文箇所に付けた合符の異なる用例の一つである。

⑳爲唐客更造新館於難波高麗館之上。（巻二二）

「新館」は「形容詞＋名詞」の構造であり，それに対し，古訓は「ニヒシキムロツミ」，即ち「新」の和訓は形容詞「ニヒシ」の連体形，「館」は「ムロツミ」と読む。岩崎本と図書寮本は「新」と「館」の二字の間に合符なし，兼右本と寛文九年版本は二字の左側に合符がある。

---

[11] 白川静 1996『字通』

[12] 小林芳規 1979「訓点における合符の変遷」126 頁『訓点語と訓点資料』62 訓点語学会

[13] 石塚晴通 1985「岩崎本日本書紀初點の合符」『東洋学報』66 東洋文庫

5．まとめ及び今後の課題

本稿では巻二二，二四を共有する『日本書紀』の四種の伝本を調査資料として，それぞれの巻二二，二四から収集した古訓形容詞について考察し，検討した結果，次のようにまとめることができる。

⑴四種の伝本において形容詞で読む漢文箇所，形容詞和訓の付訓状況，仮名遣い，符号の使用などの面には相当な相違が見られる。岩崎本のⒶ平安中期末点とⒷ院政期点とはかなり一致するのがすでに指摘されたが，形容詞和訓だけを見ると，付訓の態度ではやや相違が見られる。室町時代点の和訓はそれ以前の和訓に比して，読み方が変遷したものは少なくない。四種の伝本を比較すると，寛文九年版本と兼右本の和訓に近い，いずれもそれ以前の写本の読み方と加点当時の読み方の入り交じったものがある。

⑵使用語彙の語数は図書寮本，寛文九年版本，岩崎本，兼右本の順で増えている。四種の写本はいずれも上代形容詞，すなわち古い語の使用が多いが，岩崎本のⒸ室町時代点，兼右本，寛文九年版本では新しい読み方が見られる。したがって日本書紀の古訓形容詞はすなわち上代形容詞と見なすことはできないと考えられる。上代形容詞の残存は見られるが，それ以降の時代の新要素も含んでいる。このように特殊性を有する文献の形容詞を，一時代の代表的なものと見なすことはできないと思われる。

また，今回調査した内容以外にも問題すべき所は多く，次の三点が挙げられ，今後の課題とする。

第一に日本書紀古訓形容詞の語法についての調査，例としては，形容詞及び形容詞型活用の助動詞の未然形相当の古形「ケ」が，助動詞「む」につづいた「ケム」が，後世訓読語に伝えられることは指摘されるところであるが，このような現象について検討する必要がある。

第二に古訓形容詞と漢文の関連性についての考察，和訓を漢文の原文と対照しその訓読は一対一的な対応して固定される直訳か，意味的の融通のある意訳か，訓法を考察する。日本語とは系統が異なる漢語・漢文をどのように受け入れたのか，それに当てられた日本語の訓読はどのように適合させたのかを分析検討する。

第三に日本書紀の古訓形容詞と漢籍訓点資料に見える形容詞，仮名文学の形容詞と比較して日本書紀の古訓形容詞の性格を更に明らかにする。

（りゅう　りん・言語文学専攻）

参考文献

著作

大野晋 1993『日本書紀（解題）』日本古典文学大系（新装版）岩波書店

石塚晴通 1984『圖書寮本日本書紀研究編』汲古書院
石塚晴通 2006『宮内庁書陵部影印集成・日本書紀』八木書店
神田喜一郎 1949『日本書紀古訓攷証』養徳社
小島憲之 1962『上代日本文学と中国文学：出典論を中心とする比較文学的考察』塙書房
杉浦克己 1995『六種対照日本書紀神代巻和訓研究索引』武蔵野書院
築島裕 1963『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会
築島裕・石塚晴通 1978『東洋文庫蔵岩崎本日本書紀本文と索引』日本古典文学会
天理図書館叢書 1983『日本書紀兼右本（一〜三）』八木書店
上代語辞典編修委員会 1967『時代別国語大辞典上代編』三省堂
日本大辞典刊行会 2001『日本国語大辞典（第二版）』小学館

論文

石塚晴通 1978「前田本日本書紀院政期点（研究篇）」北海道大学文学部紀要 26(2)，P 277-343，1978-03
石塚晴通 1981「図書寮本日本書紀永治二年頃点（研究篇 1）」北海道大学文学部紀要 29(1)，P 41-211，1981-02
石塚晴通 1983「日本書紀の古訓について（其の一，二）」『天理図書館善本叢書月報』55，56
石塚晴通 1985「岩崎本日本書紀初點の合符」『東洋学報』66 東洋文庫
上野務 1952「日本書紀古訓に関する一考察 ── 岩崎本を中心として ──」『芸林』 3 芸林会
小林芳規 1969「日本書紀古訓と漢籍の古訓読 ── 漢文訓読史よりの一考察 ──」『国語学論集：佐伯梅友博士古稀記念』佐伯梅友博士古稀記念国語学論集刊行会編　表現社
小林芳規 1979「訓点における合符の変遷」『訓点語と訓点資料』62 訓点語学会
杉浦克己 2008「日本書紀古訓の諸相」『日本語学』27(12)明治書院
三保忠夫 1995「日本書紀における助数詞について」『鎌倉時代語研究 18』

林勉 1968「岩崎本日本書紀の訓点」『上代文学論叢：五味智英先生還暦記念』桜楓社
林勉 1970「日本書紀古写本における日付・時刻の訓読」『論集上代文学第一冊』笠間書院
林勉 1971「岩崎本日本書紀訓点にみられる音便」『論集上代文学第二冊』笠間書院
林勉 1972「岩崎本日本書紀における所謂再読字の訓読について」『論集上代文学第三冊』笠間書院
林勉 1973「岩崎本日本書紀訓点にみられる副詞・接続詞・助詞・助動詞の類の訓読について」『論集上代文学第四冊』笠間書院
門前正彦 1959「漢文訓読史上の一問題（二）──「ヒト」より「モノ」へ ──」『訓点語と訓点資料』11 訓点語学会